

# 論壇時評

オピニオン

## 暗い未来

## 「考えないこと」こそ罪

作家 高橋 源一郎



たかはし・げんいちろう  
1951年生まれ。明治学院大学教授。論壇時評の前任者・東浩紀氏らとの座談会で、「想像力とは遠くのものに近くのこと」などと語った。＝郭允撮影

33年前、モデルの女子大生を主人公にして、田中康夫が書いたデビュー小説『なんとなく、クリスマス』は、本文とは別に442個の注をつけて、世間を騒然とさせた(1)。だが、その評価は、流行のファッションや音楽にばかり目を向けた、軽薄な若者向けの作品、というものが大半だったと思う。わたしは、小説に潜む鋭い批評性に深い感銘を受け、そのことを書いた。もしかしたら、自分を「煙眼」と思っていたのかもしれない。だが、実のところ、なにもわかってはいなかったのだ。

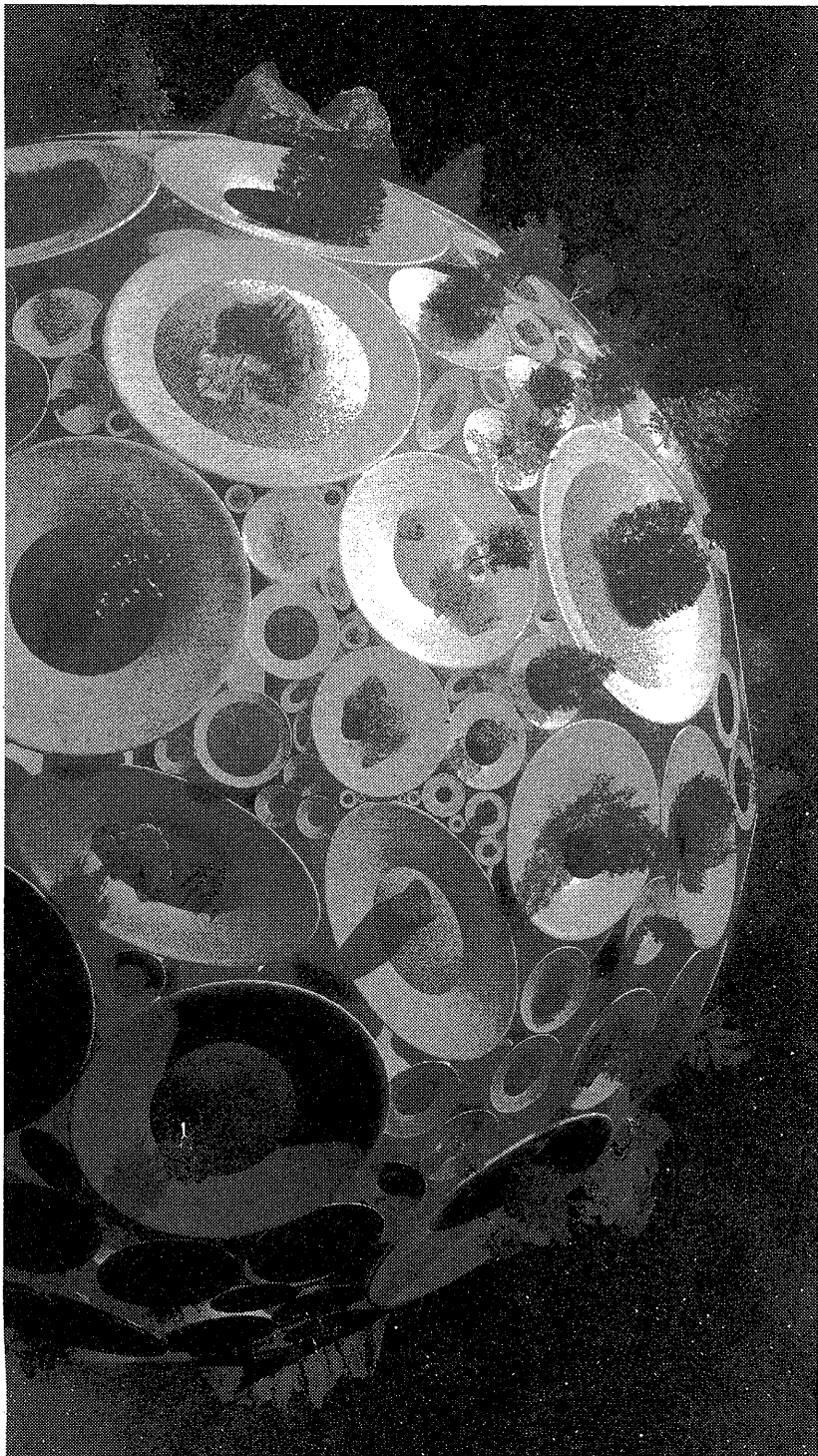
その部分とは、小説の最後、本文が終わった後にある「出生力動向に関する特別委員会報告」と「五十五年版厚生白書」だ。そこでは、「将来人口の漸減化」と「高齢化した社会」の到来が不気味に予言されている。はかなくも美しい、都会の物語は、はるか未来の「暗闇」を前にして、より一層、輝きを増していたように、いまは思う。

では、なぜ、当時は誰もそのことを指摘しなかったのか。そこで予言されていた「暗い未来」は、とりあえずは、自分たちとは関係のないものと思えたからだろう。「楽しい現在」に酔いしれていたのは、登場人物ではなく、それを批判した「世間」の方だったのかもしれない。

中央公論12月号の特集は「壊死する地方都市」。増田寛也が加わった論文(2)と対談(3)を読んでいると、誰もが暗澹とした思いにかられるだろう。いまや「人口減少」について指摘し、「高齢化」を憂える風景は、どこでも見ることが出来る。けれど、差し迫った現実には、想像よりもずっと恐ろしい。

「地方が消滅する時代がやってくる。人口減少の大波は、まず地方の小規模自治体を襲い、その後、地方全体に急速に広がり、最後は凄まじい勢いで都市部をも飲み込んでいく」(2)

- 1 田中康夫『なんとなく、クリスマス』(1980年発表、新装版の文庫が今月刊行)
- 2 増田寛也十人人口減少問題研究会「2040年、地方消滅。『極点社会』が到来する」(中央公論12月号)
- 3 藻谷浩介・増田寛也 対談「やがて東京も収縮し、日本は破綻する」(同)
- 4 特集「農家・農村は、企業とどうつきあうか」(季刊地域・15号)
- 5 有田芳生・安田浩一・五野井郁夫 座談会「差別の言葉をまき散らして憎悪をかき立てる『凡庸な悪』と社会はどう向き合うべきか」(Journalism・11月号)



「宇宙産天然地球の自然仕立てに四季折々の無添加物を添えて」

CG・小阪淳

現代文明をイメージしたCG作品を毎月掲載します。

推計によれば、100年後、この国の人口は3分の1になり、高齢人口は40%を超える(2)。いや、それすら希望的な数字なのかもしれないのだが。どうすればいいのか。増田との対話で藻谷浩介は、地方に「去る」若者にかすかな希望を託して、こういう。

「私には二人の息子がいるのですが、大学を出て大企業に入って残業続き、という人生を歩んでほしくはない。子孫も残せず、消費されるだけの一生よりも、田舎に行って年収二〇〇万円ぐらいで農業をやっているほうが、よほど幸せだと思っております」(3)

わたしたちは、原子力発電の意味について、あるいは、高齢化や人口減少について考えていたのだろうか。そこになにか問題があることに薄々気づきながら、日々の暮らしに目を奪われ、それがどんな未来に繋がるのかを「考えない」でいたのではないだろうか。だとするならば、わたしたちもまた「凡庸な悪」の担い手のひとりなのかもしれないのだ。

来月の「論壇時評」は19日(第3木曜)に掲載予定です。「あすを探る」は論壇委員が毎月交代で書きます。濱野さん以外の委員は小熊英二さん、酒井啓子さん、菅原冢さん、平川秀幸さん、森達也さん。「担当記者が選ぶ 注目の論点」は委員会での討議を参考にしています。「論壇委員会から」は記者たちが交代で書く編集後記です。